三毛乱治郎の気まぐれ日記ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞSat.7.9.2013

四日前に現代版オペラ『ポッペアの戴冠』(音楽監督・指揮：濱田芳通、演出：彌勒忠史、管弦楽：アントネッロ)を観てきた。

まずお肌の曲がり角で女神たちが双方譲らず言い争っているものだから、婦警さんスタイルの女神が交通整理に乗り出した。「ハイ、ギャルは右折、アラフォーは左折してください」そう振り分けられても、スクランブル交差点だから赤信号で老化街道を直進する人と、エイジング対策街道へわざわざ迂回する人がいるわな。表面だけ整えて安心しているけれど、疲れたときは絶対本当のトシが出るって！

それから黒服・縞ネクタイのオニイサン方が登場した。「あ、ギャングだ」ここはニューヨークのダウンタウンか？暗闇ではあるが、意識の中ではポッタンと水が垂れそうな地下道のような雰囲気と湿った石の壁を想像する。水も滴るいい男…といいたいが、パワハラ上司に疲れた若者たち。

そしてポッペア登場。何だかドレスがずん胴で中途半端に短いな、ロリータのナイトウエアみたい。風俗のお姉さん？しかしロリータ…にしては、逆毛ならぬ団子状のヘアスタイルで老けているなぁ。でも最近似たようなファッションを T.V.で見かけた。おや、アル・カポネ…と見たいけれど、そこまで権力のなさそうな 893 風の皇帝ネローネが登場。

それから妃のオッターヴィアが着物姿で出てきた。日本海系演歌歌手みたい…。いったいどこで売っているんだ、あの上着？玉虫色の羽織物のテキヤのおネエさんふうな小姓、ドゥルジッラはキャバクラ嬢っぽいけれどホステスか。するとさしずめオットーネはバーテンダーかな。港町のクラブのママのようなオッターヴィアの目を盗んで従業員が恋仲。合間にボブカットの砂かけ婆？が登場して老いを嘆く。

それにしても一人二役～四役。ヒョエー、エライ回転率の良い舞台。照明の中で時々ハートマークが花火の如く散る。ディスコティック。途中でネローネの靴色が変わるところは、茂木健一郎氏のアハ体験。「画面のどこが変わったかわかりましたか？」おまけに「女性役の男性」が退場時にドレスの裾からスニーカーというよりバスケットシーズと派手な赤ソックスを見せ「男女逆転」的ミスマッチで笑いを誘う。意表をつくところが、なかなか芸が細かい。

総体解釈を試みると、アンダーグラウンドの世界で、年老いた No.1 のセネカは N0.2 のネローネに追いやられて政権交代。ネローネは政略結婚した本妻オーターヴィアがお肌の曲がり角から 10km くらい過ぎたので離婚して、正妻の座を狙う愛人ポッペアと結ばれる。こちらも政権交代。いいのかな、まあ、若い愛人がアラフォーになる頃にはネローネも年取っているから問題ないか。いや、某国元首相のように高齢になっても恋人は若ければ若いほどいい？好みの問題だから、そんなの知るかいな。とりあえず経営者に内緒で付き合っていたバーテンダーのオットーネとホステスのドゥルジッラは半径〇m以内に近づけない法規制に則って両成敗。犯罪の理由を考慮して仲を引き裂かれることなく、嵐が来て飛行機が欠航すればいつ帰れるかわからない所へ島流し。めでたし、めでたし。

ところで、主役は誰だっけ？タイトルのポッペア…の影が薄かったが…。まあ、地味に後釜に滑り込む方が平和だ。そしてギャングのような任侠のような和洋折衷の感じ方は、人それぞれ過ごしてきた時代で違うだろう。演出家の意図と一致しようがしまいが、ストーリーの大事な主張が伝われば、バックがどの国のどんな時代背景であろうとも問題ない。要するに身近な感覚の中で内容を伝達するというのが現代版オペラなのだろう。こういう背景は伝統を継承する正統派オペラでは見られない。まさに時代と共にある。そして背景は暗いより明るいほうがよい。作曲家が「俺、こんな曲書いたっけ？」とドヨ～ンと落ち込むようでは気の毒だ。客も笑える方が喜ぶだろう。最も古～い時代の作曲家が、あの世で落ち込んだり喜んだりするかどうかはわからない。

ところで何故西洋オペラに不倫が多いかといえば「政略結婚」が原因だろう。もっとも日本も武家社会ではそうだったけれど。権力維持・拡大のための縁組は今だってなくはない。相性は努力してもダメなものはやっぱりダメ。だから「本当の愛」「本心からの愛」というのが心の飢渇としてテーマになる。

いずれにしてもクルクルとよく働く opera（労働）だった。歌い手が大道具を兼ねてソファを運ぶし。しかし動くばかりが大変ともいえない。管弦楽団の半分も自分の担当でないところではジッと座っているのも楽じゃない…忍。動いても動かなくても、意識は見えない糸で結ばれていた。衣装もコストをかけない工夫があったが、目についたのは着物の裾。そこの処理を見れば着付けが本物か否か解る。しかし…ラストシーンのポッペアの巨大な髪飾りは…ゲイシャかな…。でもそこが地味でなくてよかった。神経は最後の最後まで、小物の隅々にまで注がれる。

そして終わってみて、最初の婦警さんの交通整理が生きてくる。導入と結末の一致が、物語の意味を再確認させて印象付けた。

ぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞぞ